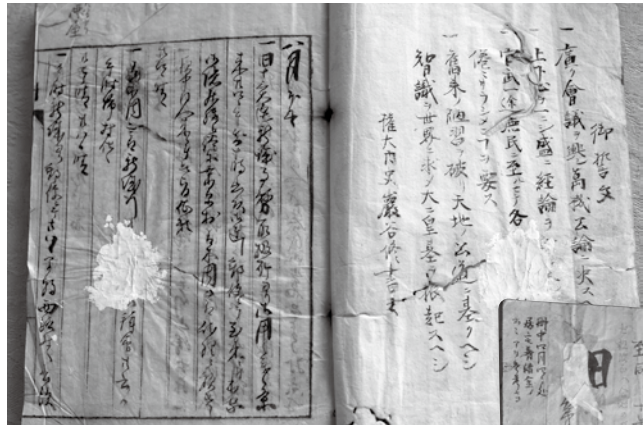




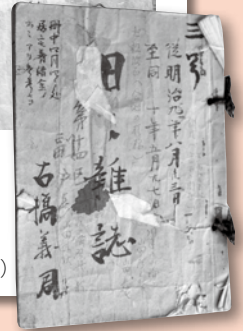
# わが故郷と日誌



**古橋 和好**  
感動創造研究所  
エグゼクティブフェロー



古橋義周日誌（日誌の出し）



古橋義周日誌（明治9年）

昨年9月の国会所信表明演説の中で、安倍首相は、地方創生に触れて、古橋源六郎暉兒を引き合いに出されました。

『天は、何故、自分をすり鉢のような谷間に生まれさせたのだ？』源六郎暉兒は貧しい村に生まれた境遇をこのように嘆いた。しかし、ある時、一つの確信に至った。『天は、水郷には魚や塩、平野には穀物や野菜、山村にはたくさんの樹木を、それぞれ与えているのだ』そう確信し、植林、養蚕、茶の栽培など、土地に合った産業を興し、生まれ故郷を豊かな村へと発展させることに成功した」と演説された。

私は昭和20年11月、まさしく「すり鉢のような谷間」に生まれた。その谷間とは、愛知県北設楽郡稲武町大字稲橋字小井沢洞（現在の豊田市稲武町）。人口3,000人余。私の曾祖父古橋義周は、古橋源六郎暉兒、その長男義真の大番頭として仕え、すり鉢のような谷間の地に合った産業を興し、教育を振興させ、当時の稲橋村を豊かな村へと発展させるために粉骨砕身努力した。そして、村興しを進めるための記録を取ることをいとわなかった。私の手元にあるのは明

治9年から43年までの全六巻の日誌。毎日毎日、34年間欠かさず、当日の天気も含めて丁寧に記録されている。筆字・草書のため、私にはしっかりと読み取る力はない。その後、私の父も、私も毎日の日誌を欠かさず書き続けてきた。私の何代か後の子孫は、私の日誌を読んでもくれるだろうか、理解してくれるだろうか。古橋源六郎暉兒・義真翁の館は現在、古橋懐古館として存在し、館内は当時をしのぶ貴重な資料等が陳列され、歴史家、観光客が時折訪れている。毎年夏、孫を連れて帰省しているが、すり鉢のような谷間には、杉、檜、松林等が生い茂り、山紫水明の豊かな自然と未来を見据えた教育が根付いている。私の心の中にも古橋家の精神の一部が引き継がれている。



古橋懐古館